

会員の広場



中朝国境にて

濱田 義文（東京）

鴨緑江。白頭山を源に中朝を画して黄海に注ぐ大河である。2019年2月23日金正恩を乗せた緑の特別列車が、この大河に架せられた橋を渡り、長駆ベトナムに向かった。橋は、日本統治時代に架設された二本の鉄橋で、上流側の橋は中朝友誼橋と呼ばれ、鉄道道路

併用橋である。下流側の橋は鴨緑江断橋と呼ばれている。朝鮮戦争のとき国連軍の空爆で破壊され、現在は寸断されたまま、遊歩道として整備され、観光スポットになっている。

昨年6月、私は満州ツアード、丹東を訪れ、鴨緑江断橋に上がった。橋から北朝鮮新義州側を眺望すると大観覧車が見えるが、回転していない。河辺にはリゾートホテル風のモダンな建物がみえるが、人影はない。中国丹東側を振り返ると、橋上は中国人の観光客で溢れていた。シンガポールでの第一回米朝会談（6月12日）の直後だったが、緊張感もなく、朝鮮への日帰り遊覧も盛況のようだ。

鴨緑江を遊覧船でクルーズした。北朝鮮側は、林と畑が広がっている。中州では、数人

のひとが泥まみれになって貝か魚を採っている。北朝鮮のひとは一目で見ればわかるという。痩せていて顔色が悪いとガイドが説明してくれた。中国側は高層マンションが林立している。護岸では老人や子供が川遊びに興じ、朝鮮側の岸近くまで遠泳していた。

虎山長城に向かった。「万里の長城」の東端に位置する明代の遺構である。長城の石楼と戦台が修復されていた。「長い壁」は異民族の侵入を防ぐための要塞であったが、明は清の入関をゆるし、あえなく滅亡した。

長城を下り、土産物屋の並んだ小径をぬけると、のどかな小川にぶつかる。川幅二、三mの両岸にフェンスがある。人民解放軍の兵士がいなければ、ここが国境とは気づかない。

「一步跨—中朝国境」という石碑があり、観光客が記念写真を撮っている。遠い昔、川をひと跨ぎで往来していた所であろう。

「国境」とは何だろうか。米国では「壁」を建てようとしている。英国でも「関」が設けられるだろう。わが国でも隣国と「境」を争っている。

「この国のかたち」事始めによると、司馬遼太郎は「NATIONを書くつもりもなければ、COUNTRY、STATEを書くつもりもない、この国のLANDを書いてみたいのです……」云々と。

「くに」とは何か、中朝の国境を目の前にしたとき、あらためて向き合ってみたいと思った。